

史跡永福寺跡昭和57年度発掘調査概報

史跡永福寺跡発掘調査団

(1) 発掘調査の経過

昨年度の試掘調査の結果をもとに、史跡永福寺跡整備計画準備委員から、苑池東側汀線をある程度まとめた面積で確認できないかとの指示を受け、今年度の発掘調査団は昨年度の第3トレンチ北方に発掘地点を設定した。現生樹木と電柱などを避けるため発掘区はひとつづきにはできず、亀ヶ淵へぬける道路の西側沿いに、南から順に82Aトレンチ(2×5m)、82Bトレンチ(4×20m)、82Cトレンチ(2×5m)を設定した(図1)。このうち82Bトレンチは南及び東に約10m拡張し、合計110m²を調査した。

現地発掘調査は5月21日に重機を導入して最近の客土と旧表土を排除することから始めた。旧水田床土以下は人力によって掘り下げ、玉砂利の散布する面(A面)を各トレンチで検出した。出土遺物から見てこの面はかなり時代が降ると思われたので、各トレンチでは部分的なサブ・トレンチによって以下の面を探索し、またBトレンチ南部では水を流したような凹地(水落遺構)検出に伴う拡張区を掘り上げた。6月12日までの間で雨天



1. 永福寺跡東方山腹から見た調査区全景

を除く20日間を費して、必要な記録を取り現地調査を終了した。(河野)

(2) 検出された遺構

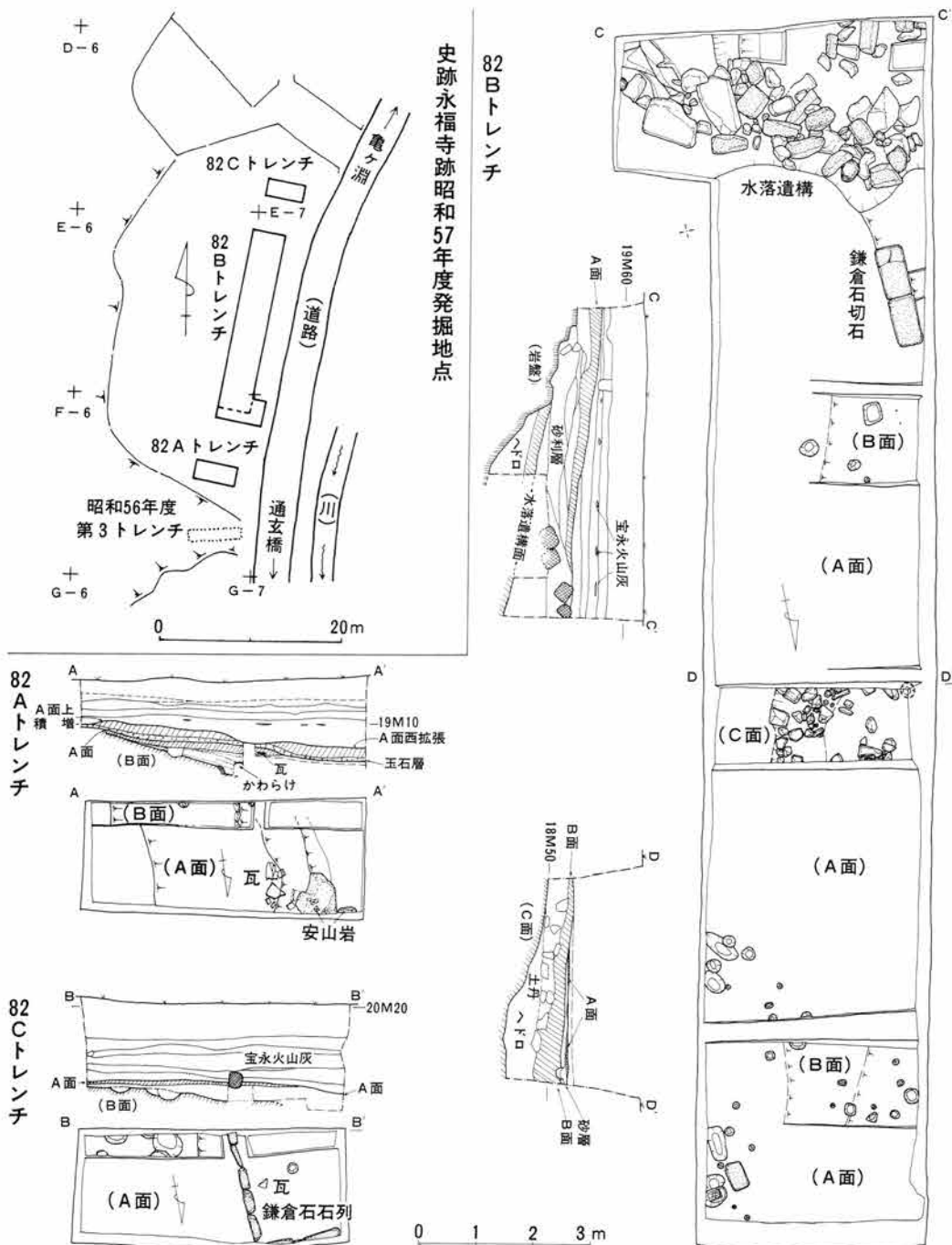
①82Aトレンチ(図1及び写真2,3)

現地表下40~60cmは近年の盛土で、それ以下が旧水田の耕土の粘土層となっている。この粘土層の下部には宝永年間の富士山噴火によると思われる火山灰が、ブロック状に点々と見出せる。現地表下80ないし100cmで土丹(泥岩)をつき固めた面に当るが、これは上面に玉石がわずかしがなく、新しい時代の積み増し面と考えられた。そこでトレンチ南辺に細いサブトレンチを入れてみたところ

2. 82Aトレンチ全景(西から)



3. 82Aトレンチ南壁の土層断面



〔図1〕発掘調査地点トレンチ配置図と各トレンチ平面及び断面図

ろ、厚さ15cmほどのこの地業層下には、砂と玉石の混合層に覆われた良好な地業面が見られた。この面は昨年度調査で検出した面と同一と考えられ、これをA面と称する。A面は西へ向かって傾斜しているが、トレンチ西部では玉石・砂層の上部に

貼り増しが認められた。この貼り増し下ではA面そのものは弱くなり消滅してしまうので、サブトレンチではさらに下方を探索したところ、砂と粘質土の互層を乗せるきわめて良好な地業面を検出した。これをB面と称する。B面を覆う砂層中か

らは、手づくね成形タイプのかわらけが出土し、またB面の地業層中には永福寺の古手の瓦が敷き込まれていて、かつ粗胎の瓦が混らないことから、このB面は13世紀中頃以前の造成にかかるものと考えられた。B面は西に急な傾斜を示し、トレンチ中程には土丹塊を並べた段差が認められ、その上面には池中堆積物と思われる砂と粘土が堆積しており、ここが寛元・宝治年間の大改修後の汀線になるのではないかと推測できる。

② 82Bトレンチ (図1及び写真4～6)

Aトレンチの結果をにらみつつ、全面をA面まで掘り下げた。A面は東側では堅固な地業面であるが西側では薄く弱い。そしてA面のとぎれるところでは、AトレンチB面上に見られた砂層が認められ、B面埋没後にA面が一部をB面と共有し

つつ造成されたことが確認できた。A面上より出土する遺物は瓦片が多く、粗胎のものが相当の割合を占める上に磨滅したものもかなりあり、さらに黄瀬戸に似た陶片が出土するなど、A面の使用時期はかなり降るものと考えられる。A面そのものは西側へわずかに傾斜するだけで、池汀線としての急傾斜はもたない。ただしトレンチ南西部に鎌倉石の切石が2個据えられていることからすると、池汀に近い張り出し部とも考えられる。

トレンチの中央と南北両端でA面の軟弱部を抜くサブトレンチを入れてみたところ、北端と中央の2ヶ所ではいずれもB面を検出できた。Bトレンチ内でのB面の傾斜はゆるやかで、先述の張り出し部説を裏付けるようであった。

中央北部のサブトレンチにおいてさらにB面以下の探査をしたところ、B面は厚さ10～50cmの堅い地業層から成っており、その下には黒褐色のヘドロ（植物遺体のようにも見えるので、一種の泥炭であろうか）層が厚く見られた。このヘドロ層中からは何らの人工遺物は見出せず、現地表下1.6～2.5mのところまで再び堅い地業面に当たった。これをC面と称する。C面はサブトレンチ中程において急な段差を有しており、B面以前の池汀線と考えられた。Aトレンチの結果と合わせるならば、C面こそ13世紀前半以前の面であり、永福寺創建時のものではないかと思われるのである。

Bトレンチ南端部はA面の地業が弱く、B面が



4. 82Bトレンチ全景（北から）



5. 82Bトレンチ中央サブトレンチ検出のC面



6. 82Bトレンチ南端検出の水落遺構（西から）

見出せないばかりか、鎌倉石の切石や大型の土丹が孤状に散乱しており、苑池のオーバーフローのような施設の存在が予想できた。そこでこの部分を東および南へ少し拡張してみたところ、石材が乱雑に落とし込まれた凹地となった。石材はとくに積まれたものとも思えず、この部分ではB面が弧状に切り取られて凹地が作られ、その壁際に石を投げ込んだものと解釈しうる。そしてこれらの石の上には砂礫が厚く堆積していたが、礫は土丹が水磨で丸くなったものであり、東方からの流水のあったことが推察できる。すなわちこの部分は池に水を流し込むインテイクであり、それも堆積している砂礫の粒状性からみて懸樋か滝のようなものによる強い水流を考えたい。そこでこの部分を水落遺構と称した。水落遺構の堆積砂礫中からは美濃・瀬戸の陶片が出土し、その示す年代は15世紀前半を遡れない新しいものであった。

さらにその下方では、中央北サブトレレンチ同様のヘドロ層が見られ、それは急傾斜に削られた岩盤上に堆積している。すなわちここではC面は岩盤掘削面になるわけである。

③ 82Cトレレンチ (図1及び写真7)

層位的には他のトレレンチと同様であるが、A面はとくに軟弱で玉石も少なかった。トレレンチ南端において入れたサブトレレンチでもB面が検出できたが、ビットが密に検出された。Bトレレンチ北部からCトレレンチにかけてのB面には何らかの建築物があったのかも知れないが、今回の調査ではそこまで明らかにはしえなかった。

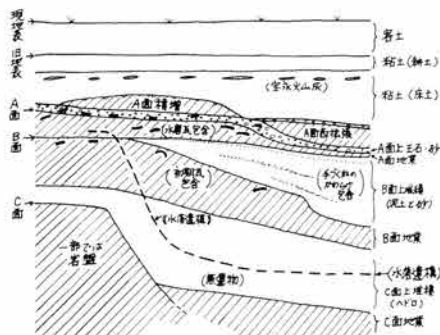
Cトレレンチで特筆すべきは西部に検出された鎌倉石の切石列である。これはA面を切って設置されたものともA面によって脇を固められたものと



も、セクションからは判断できなかった。しかし南北方向石列の東側にはやや固い土が石の上端の高さにまで堆積しており、A面上に築かれた一種の地覆施設と考えておきたい。ただ石列はL字状に西方に曲がるので、あるいはA面段階の護岸施設とも考えられ、今後の調査に結論を委ねたい。

④ 遺構のまとめ

各トレレンチの結果から苑池東岸の汀線に関する層序関係をまとめると、図2の模式図のようになる。また各面の絶対高を求めると、表1のようにまとめられる。後述の出土遺物を併せ考えるならば、今回調査のA面には15世紀前半以降16世紀という年代が、水落遺構は15世紀前半頃、B面は13世紀中頃以前、C面は13世紀前半以前という年代が与えられよう。これら各面と、昨年度調査で各地点から検出された池汀とは、現段階では厳密な対比は問題が多く、保留としたい。(河野)



〔図2〕遺構面・土層の断面模式図

	82Aトレレンチ	82Bトレレンチ			82Cトレレンチ
		南端	中央	北端	
現地表	19m 40	20m 00	—	20m 20	20m 30
鉄火山灰	19m 20~40	19m 20~40	—	19m 15~40	19m 10
A面	(埋没) 18.75~18.80 (露出) 18.80~70 (点検) 18.05~18.45	19m 20 ~ 18m 70	18m 90~80	18m 85~70	18m 90~70
B面土層 泥土上面	18m 85	18m 70	18m 85	18m 75	18m 85
B面	18m 90~25	—	18m 90~70	< 18m 60 ±	18m 75~55
C面	< 17m 60 ± *	< 18.75 ~ 18.30 ~ 17m 20	18m 45 ~ 17m 75	—	< 17m 50 ± *

* 断面観察より水位レベルに相当する * 断面観察より推定 ** 水落遺構に相当する

〔表1〕主要層の絶対高

(3) 出土遺物

1. 瓦類

瓦類はテンバコ13箱余り出土した。大部分は女瓦、男瓦であったが、鐙瓦12点、宇瓦16点、文字瓦6点、鬼瓦3点も出土している。

①鐙瓦 (図3-1~4)

1, 2は八葉複弁蓮花文を主文とし、中房には蓮子が、その外側には雄シベ状のものが表現される。胎土は砂粒を含むが良好で、焼成やや甘い。表面薄黒色、芯部灰褐色を呈す。BトレA面上出土。

3は内区に左巻き三巴文を、外区に珠文を配し、周縁は幅広で高い。胎土やや粗く、焼成堅く、灰黒色を呈す。4も主文は三巴文と考えられる。男瓦部との接合は印籠づけの手法による。粗胎だが焼成堅く、暗灰色を呈す。3, 4の瓦当面には離れ砂の痕跡が顕著である。共にBトレA面上出土。

②宇瓦 (図3-5~12)

5~9は四葉の花弁を十字に配する花文を中心飾とし、その左右に唐草を反転させる均正唐草文であるが、中心飾の花弁や唐草文に若干の差異を認める。5, 6は同范品と考えられる例で、6は焼成前に斜めに切断して作られた隅切瓦である。中心飾から少し離れて左右に唐草文を三反転し、二反転目の支葉は上向きとなる。女瓦凸面には縄目の叩きを残し、瓦当側は幅広に横方向のナデを施す。瓦当面には粗砂粒の付着が多い。5はCトレA面より上の粘土層中、6はAトレA面下出土。7は中心飾の花弁の中央が凹みやややハート形に近く、唐草の二反転目の支葉は下向きである。AトレA面上出土。8は中心飾の花弁が丸味をもち、



8. 82AトレンチA面中出土の瓦群

これに接して唐草文が三反転する。女瓦凹面には粗い布目があり、凸面では縄目の叩きを縦横のナデによりすり消す。BトレA面上出土。9も同様の瓦当文様をもつが、范ズレがひどく、脇の周縁にまで文様のはみ出ししている。瓦当上端は幅広くヘラ削りを施す。BトレA面上出土。

昨年度の調査報告に記した宇瓦I類aは、中心飾の各花卉が中央の凹むハート形を呈し、そこから少し離れて唐草文が反転している点で、今次の5~7に類似する。しかし5, 6は二反転目の支葉が上向きでやや異り、7は各支葉が長く横須賀考古学会所蔵の宇瓦(註1)に類似していることから、少なくとも3種のタイプが知られてくる。同様に、8は中心飾の花弁が丸くこれに接して唐草文が反転する点で、宇瓦I類bと類似する。しかしI類bは唐草文が二反転しさらに少し伸びるもので、本例の如く三反転しないことから、この手にも2種のタイプがあることが知られる。5~9はいずれも胎土良好だが焼成は甘く軟質で、色調は薄黒色・灰褐色を呈する。

10は陰刻の下向剣頭文で、鍋は太く先端は尖る。胎土良好だが焼成は甘く、灰褐色を呈する。BトレンチA面上出土。

11は陽刻の下向剣頭文で、女瓦部凹面には細かな布目痕が残る。胎土良好で焼成は甘く、茶灰色を呈す。BトレA面上出土。

12は太い陽刻で「福」字が捺し出されたもので、瓦当面には砂粒が多く付着する。「永福寺」銘を左から太い陽刻で表わす宇瓦の破片であろう。BトレンチA面上出土。

③男瓦、女瓦 (図3-13~16)

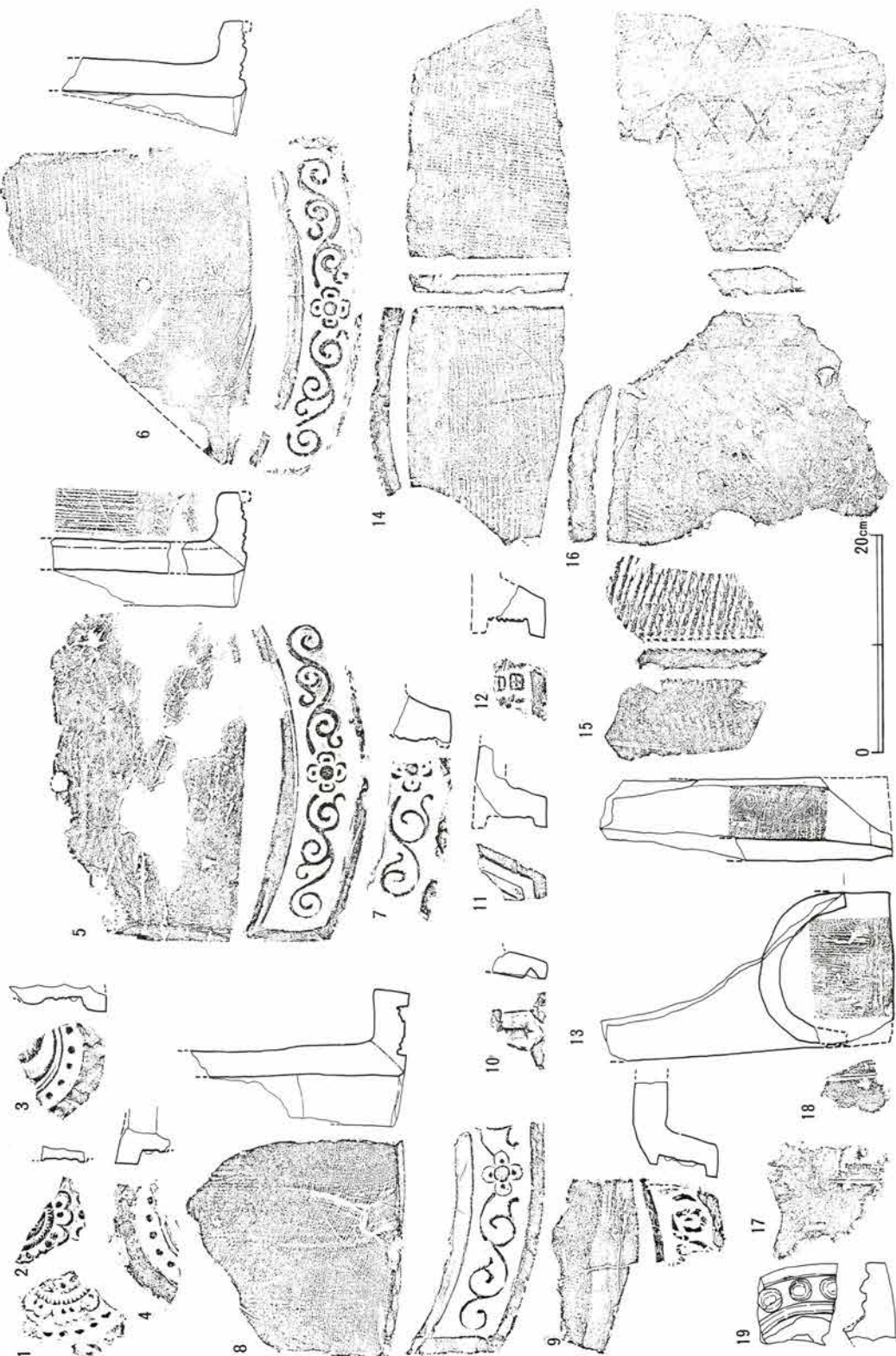
大量に出土したが、全体形の復原しうるものではなく、磨滅の著しい小破片が大部分であった。

男瓦はすべて有段の玉縁付きのもので、凸面には縄目叩き後に縦方向のナデが施され、凹面には布目痕を有する。側面はヘラ削りが施される。

女瓦は一枚作りのもので、凸面には縄目や大きな斜格子の叩き目を残す例が多く、その他に小ぶりの斜格子文、斜格子内に花菱文を配したのも少量出土している。

④文字スタンプのある瓦 (図3-17, 18)

17, 18は女瓦凹面に文字スタンプが捺されたも



〔图 3〕 瓦

のだが、剥落が著しく17の「福寺」、18の「寺」字が枠の一部と共に残るにすぎない。昨年度調査では、「永福寺」、「文暦二年永福寺」の二例の銘が知られているが、枠の形から見て後者のものと考えられる。胎土は砂、小石を含み粗質だが焼成は堅く、灰白色を呈する。BトレA面上出土。

⑤鬼 瓦 (図3-19)

図示した19は外区の珠文の一部を残すのみである。焼成軟質で灰褐色、BトレA面上出土。

(註1) 赤星直忠「永福寺址の研究」、『中世考古学の研究』昭和55年、所収。

P.45の図5-10にあり。(原)

2. 陶磁器

三ヶ所のトレンチ合わせて40片ほどの陶磁器片と、多量のかわけが出土した。

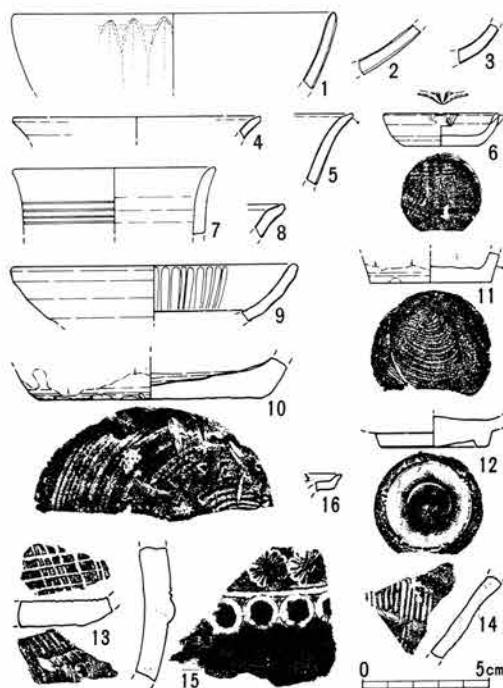
①舶載陶磁器 (図4-1~5)

1~3は青磁碗および皿、4は白磁口元皿、5は同碗である。いずれもA面上に出土した。鎌倉市中に一般的なものであるが、A面の年代よりは古いもので、伝世または混入品であろう。

②国産陶器 (図4-6~16, 図5-1~7)

図4-6~14は瀬戸及び美濃の産品である。6は無釉の入子、9は菊花ふうの灰釉皿、12は黄瀬戸ふうの碗底部、13はおろし皿で、いずれも上部粘土層中より出土。7、8、10は灰釉の碗鉢類、11は鉄釉の瓶底部で、これらは水落遺構中出土。14は鉄釉の搥鉢でA面上出土。15は瓦質手あぶり片である。16は伊勢系の土鍋口唇部だが、上反する器形は鎌倉初見である。A面上出土。図5-1~6は常滑の産品で、3の捏鉢片はA面下に、他はA面上に出土した。7は東播(魚住)系の捏鉢片だが、やはりA面上出土である。(河野)

③かわかけ (図6)



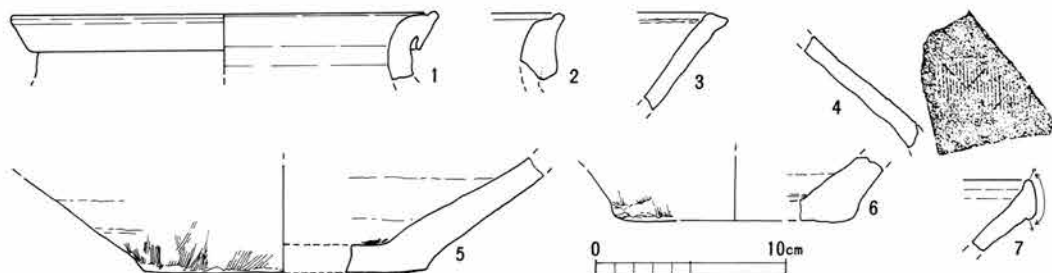
〔図4〕陶磁器

1~6はBトレ水落遺構より出土したもので、いずれもロクロ成形、糸切り底のものである。10はA面上出土で器壁やや厚く口縁に外反傾向を有する。底は糸切りである。これらは鎌倉のかわけ編年では室町時代とされるものに相当する。

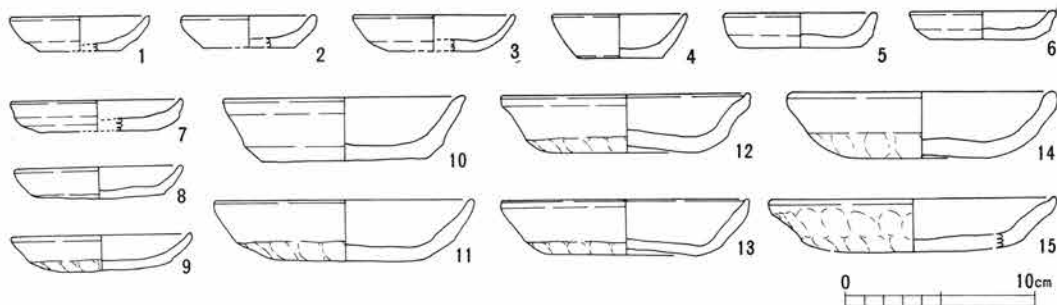
7および12~15は各トレンチB面上相当層より出土したもので、12以下は手づくね(内型)成形である。口唇の直立と上げ底状の底部は、鶴岡八幡宮境内での編年からすると糸切り底のかわけと相伴するもので、現に7は小型の糸切り底のかわけで同層位に出土している。(福田)

3. 木製品 (図7)

1はBトレA面上出土の木札で表裏ともに墨書痕があるが、内容は判読できない。2は篋状製品、



〔図5〕陶磁器



〔図6〕かわらけ

3は板で、いずれもA面上出土。4～6の箸状製品はBトレ水落遺構中より出土した。（福田）

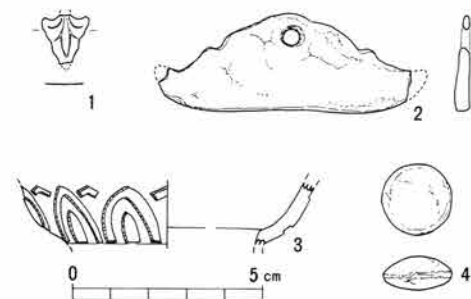
4. 金属・土製品（図8）

1は葉形の飾金具で銅芯だが、陰刻された葉脈部に渡金の痕を留める。2は火打金で両側端をわずかに欠く。下端の火打ち面は厚く、使用により凹む。鉄製だが表面には銅鍍が見られた。3は銅製の蓮華座で、鋳物の表面をタガネではつり、花卉および鎗部に錫か鉛の象嵌を施している。象嵌は間弁にその一部を留めていたにすぎない。小片のため請花か反花か、また燭台か仏像台座か等は判定できない。Bトレ水落遺構出土。

4は土製の基石で、水落遺構排上より採集。型による貼り合わせ作りで、類品は極楽寺旧境内より出土している。（福田）

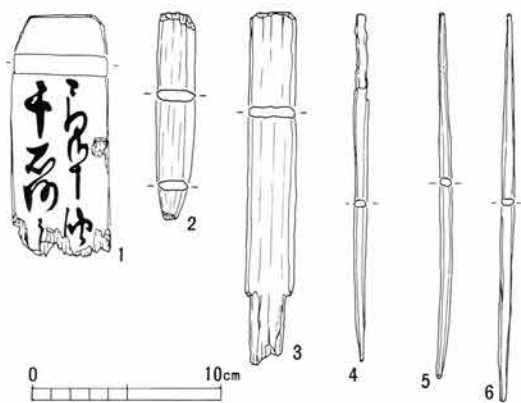
結 語

今回の調査は史跡整備のために、苑池の東側池汀線にある面積の中で連続的にとらえる、ということが主眼であった。この点からのみ考えれば、A～Cの各面ともに汀線の一部をなしていたことに間違いはないので、目的は達せられたと言えるし、さらに「水落遺構」とした取水遺構検出というおまけまでついた。しかし各面に対して与え



〔図8〕金属・土製品

〔図7〕木製品



る年代は、永福寺の存続年代との関係で新たな問題を提起するものである。また少なくとも四時期にわたる遺構の重なりを検出は、寺院庭園史上貴重なものであり、今後の史跡整備にも影響を与えずにはおかない。昨年度分と併せても、やっと永福寺史に一步を踏み込んだばかりのようで、これからの慎重な調査が重ねられねばならない。

（大三輪）

〔発掘調査団構成〕

団長 大三輪龍彦
主任調査員 河野真知郎
調査員 馬淵和雄 原広志
調査補助員 福田誠 宗台秀明
浜口康 河村裕介
カメラマン 木村美代治

史跡永福寺跡昭和57年度発掘調査概報

発行日 昭和57年10月30日

編集 史跡永福寺跡発掘調査団

発行 鎌倉市教育委員会

印刷 中川印刷株式会社